

## 哲学なしで生きられるのか—大学における倫理・宗教・哲学教育の役割—

日時: 12月12日(土) 13:30~17:00

会場: 日本学術会議講堂

(東京メトロ千代田線「乃木坂」駅5出口徒歩1分)

### 哲学と大学教育

戸田山和久 (哲学委員会委員長)

哲学系諸学の大きな特徴は、それが人類の知的活動のうち最も古くから行われてきたものを対象とした研究であること、そして同時にその知的活動の直接の継承者でもあるということにある。たとえば、プラトン哲学を研究している研究者は、プラトンの思索を歴史的対象として客観的に研究すると同時に、ある仕方ですらに展開すること、または批判的に乗り越えることを目指している。このような意味で、この研究者はプラトンを引き継いで彼のやろうとしていた営みと同種のことをやろうとしているのだ、とも言える。哲学系諸学のこうした特徴は、一方で社会からの尊敬の源にもなってきたし、逆に揶揄の原因にもなってきた。

こうした特徴を持った哲学系諸学が、現代に生きるわれわれに懐古的関心を満たすこと以外の意義を持つとしたらどのようなものであろうか。哲学系諸学は、ものづくりや経済活動を通じて、社会にじかに富をもたらすという類の貢献はできないし、また期待されてもいない。しかし、そのないうる貢献の一つは、目には見えにくい、人類の生存と幸福にとってきわめて重要なものである。哲学系諸学が社会に貢献する最も重要な回路は、ひとをつくること、すなわち教育である。振り返ってみれば、孔子もソクラテスも、思想家・哲学者である以前に、偉大な教師だった。

では、哲学系諸学はどのような「ひと」を育てようとしているのだろうか、また育てることができるのだろうか。二つのことがらを指摘することができる。まず、哲学系諸学の教育は古今の哲学テキストに親しむことを不可欠の要素として含む(それだけに終始することはありえないし、あってはならないが)。学生は哲学の学習を通じて、人類が長い間取り組んできた根本的な問いに向かうことの魅力を知り、人類の知的遺産に対する畏敬の念を抱くだろう。また、過去の知的遺産をそれとして理解することに加えて、現代の諸問題や現代人の置かれた状況と関連づけながら学習を進めることによって、古代から取り組まれている問題の多くは、現代にも形を変えて存続し、自らの生とも深く関係する普遍的な問題であることに気づく。こうして、学生は自らもまた人類の知的遺産の継承者の一員であるべきことを自覚するだろう。つまり、哲学系諸学の育てようとする人は、まずもって人類の文明の継承者である。

哲学系諸学は、それが問題に取り組む際の思考様式によっても特徴づけられる。つまり、哲学系諸学は、問題をより原理的に、個人の利害を離れて普遍的に、できるかぎり共有可能になるような明晰さをもって、批判的に反省的に、他者との対話のうちに考えようとする。これらの思考の特質は、もちろん他の学問分野も共有している。しかし、哲学系諸学は、これらの特質をいささか過剰に、自覚的に備えた形で思考しようとする。こうした思考の特質と強度は、いわゆる「伝統的哲学問題」を考える場合だけでなく、われわれが自分たちの社会で出会うさまざまな問題を深く考えようとする場合に、きわめて重要なものとなる。哲学系諸学の教育はすべての学生にこうした思考のスキルと態度を与えるだろう。つまり、哲学系諸学の育てようとする人は、第二に、民主主義社会における熟議に参加し貢献できる人間である。哲学系諸学が、ほとんどすべての近代国家において、教養教育の中核をなすと考えられてきたのはこのためである。

とはいえ、以上の貢献は、哲学系諸学の教育が明確な目的を持って適切に行われる限りにおいて実現されるものに他ならない。だとするならば、哲学系諸学の教育・研究にたずさわる者の務めは、以上の理念をそれぞれの教育の現場でどのように現実化するかに知恵をしぼることだろう。学術会議・哲学委員会による「哲学分野の参照基準」の制定は、そのための試みである。それは、教育する営みである哲学の自己再定義の試みであって、決して哲学教育を一定の型に押し込めようとするものではない。また、この参照基準制定のプロセスそのものが、徹底した討論による原案作り、諸学会を通してのパブリックコメントの募集、それを受けての修正、公聴会の場での議論といった、すぐれて哲学的な対話の成果である。